

宗ティンティン*

Tingting ZONG *



西南シルクロードー「茶馬古道」に関する民族文化研究

その2. 茶馬重鎮「大研鎮」と納西族の変遷

An Ethnic Cultural Study On the Southwest Silk Road

(茶馬古道: The Ancient Routes of Tea and Horses)

Part 2. Changes of the “Tea-horse town” Dayan and Naxi Race

一. 麗江ナシ族文化の中心「大研鎮」^{da yanzhen}

麗江市古城区の大研鎮は、かつて古西南シルクロード¹⁾における最も重要な経由地として栄え、茶馬古道²⁾貿易の重鎮であった。ここは、一年中雪が積っている険しい高原地帯のチベットへの入り口にも位置し、荷馬隊がチベットへ入る前にここで物を調達したり、東西南北からの品物を集散したりする拠点として、さらに地元の品物と茶馬古道の品物を交換する市場としても大いに繁栄した。

大研鎮は800年前に地元住民の納西族^{na xi}(本論文では「ナシ族」と称する)の都となり、ナシ族の文化、経済、政治の中心となった(郭1999 p.34)。ナシ族により保存された麗江の茶馬文化の価値はいまだに注目され、かつて茶馬古道に関わる古い建築が今も多く残されている。大研鎮は1997年にユネスコ世界遺産に登録されている。

筆者が現地調査をおこなっていた数年前でも、かつて茶馬古道の荷馬隊のリーダーの子孫や荷馬隊の旧居の住人など、ナシ族出身の人々



写真1 麗江大研鎮荷馬隊リーダーの旧居
(出典)2006年筆者の撮影による

* 中部大学国際関係学部中国語・中国関係学科

に何回も出会っている(参考写真1)。

大研鎮は茶馬古道の重要商業地だけではなく、ナシ族木氏土司^{tù sī}³⁾の官邸があったため、中国雲南省西北地区への文化発信地としての役割も果たしていた。木氏土司から始まり、ナシ族は大変教育を重視したために、大研鎮出身の知識人や詩人など数多くの文化人が輩出した。今まで筆者が読んだ歴代木氏が書いた書籍(参考:『木氏土司与麗江』)や大研鎮の建築などを見ると、ナシ人が従来から中原漢文化⁴⁾に対する憧れが鮮明であり、積極的に中原文化を取り入れたことも確実に認められる。

上述した中原地区では、ナシ族知識人たちにより、既に消滅していた漢文化の道教音楽の一部や中国の古典文学の「吟誦」(節をつけて詩文を詠誦する)などの古典文化が、いまだに奇跡的に大研鎮に継承されている(筆者の調査による)。

このように積極的に他文化を取り入れようとする優れた環境の中で、茶馬古道文化は長い間麗江大研鎮に依存し、ナシ族と共存してきた。

1. 人口

麗江古城(大研鎮の通称)は南宋時代の末、元時代の初め頃に作られ、現在まで約800年の歴史を持つ。古城の全面積は3.8平方kmで、海拔は2,416mである。雲南省の西北部に位置し、さらにナシ、漢、チベットなどの各民族文化の交流地ゆえに、従来から軍事拠点としても重視されている。

1253年、フビライが大理を征伐した時に、ナシ民族の首長の支援を受けて、金沙江を渡り、しばらく麗江古城で軍隊の調整をしていた。その時に関連した昔話がナシ古典音楽「白沙細楽」の歌詞にも記録されている(和2004 p.109)。

元朝の始め頃、古城には1,000余りの世帯が住んでおり、明時代初期(1368年頃)になると、麗江古城の街作りや貿易市場が整備され、明朝末になると貿易が繁栄し、古城の規模も拡大した。1639年、明代著名旅人・詩人の徐霞客^{xú xiá kè}⁵⁾が、麗江の木氏土司の招きで麗江を訪ね、当時の麗江の古城を次のように記述している。「居廬駢居, 榮坡帶谷, 民房群落, 瓦屋皆比」、「宮室之麗, 擬于王者, 民居群落, 瓦屋栉比。」(訳: 民家は一つ一つ繋がりに、瓦の家はあちこちに見かける。木氏の官邸は王者のようで、群れになっている瓦の民家は至るところにある(何2004 p.20)。徐氏が書いた詩から、明時代には、既に麗江古城には数多くの住民が住んでいたことが伺える。清朝末には、大研鎮における全鎮人口は3,000人以上に達した。なお、現在の古城大研鎮には6,100世帯が住んでいる(参考写真2)。

2. 経済

麗江大研鎮は、四川省から雲南省、チベット、インドへ行く古代西南シルクロード「茶馬古道」の重要な経由地でもあったことで、清時代の初めから、古城には多くの旅商人が滞在し、木里、源塩、永寧、下関、大理、維西及び中甸、ラサなどの各地からやってきた荷馬隊が、さまざまな日常用品や特産品をここで交換していた。ここはまた、インドに行く国際貿易の重要拠点でもあった(木2003 p.56)。(その1の茶馬古道地図参考)

古城大研鎮の中心にある「四方街」は、古城の中のもっと大きい広場であり、清時代の初め頃から、遠い旅をしてきた旅商人や地元の商人たちは、この四方街で交易していた。雲南南部西双^{xishuang}版^{ban}納^{na}のお茶とチベットの薬材、麗江の馬や驢馬などの交易が盛んであり、遂にここは雲南省



写真2 大研鎮と玉龍雪山
(出典)2005年筆者撮影による

西方地区における重要な品物の集散地となった。それ以外に、麗江古城は手作り工芸品の特産地でもあった。大研鎮には、現在でも銅製品、革製品、銀製品などの職人が住んでいる。ナシ語では四方街のことを「工本^{gōng běn}」というが、倉庫が集まっている場所という意味である（木2003 p.182）。

3. 教育

大研鎮は、経済の中心だけではなく、歴代木氏土司の影響を受けて、文化の中心地でもある。1723年正式に土司制度が廃止され、土司の特権である学問が解放されたので、1706年、麗江府が「学宮」を作ってから、一般の貧民の子どもでも勉学できるようになった。また、歴代の麗江府知府が学問を奨励したために、麗江から多くの人材が輩出した。特に1723年以後、学問をすることが麗江の風潮となった。孔子の66代目の孫孔興詢、管学宣などが、個人的に漢文学を教える学習塾を創り上げた（楊2005 p.103）。

さまざまな教育機関の中では、特に「私塾」の影響力が大きかった。ナシ族の人々は子ど

もを私塾に行かせ、科挙試験⁶⁾に合格することを目指した。その頃から大研古城には多くの知識人が現れた。道教知識の神である「文昌帝君」を謳える道教儀礼音楽である「ナシ古楽」もその知識人や裕福な人々の教養の一つとして継承されてきた。「私塾」は麗江教育史の中でも見逃せない重要な教育機関であった。私塾に入るには年齢の制限はなく、費用も安価で、学習する年限もないので、貧しい家庭から裕福な家庭出身の子どもまで、誰でも気軽に勉強できる場所であった。私塾で習う教科書としては、最初の漢字を習うための『三字経』、『千字文』、そして科挙試験の必修科目『四書五経』、レベルの高い『論語』や『孟子』まで勉強することができた。教える教師も科挙試験をパスした尊敬される人であった。こういった伝統的な教育機関から、ナシ族の多くの知識人が育っていった（唐2001 p.109）。

上述した私塾にはさまざまな特典があったため、辛亥革命（1911・12）後1930年代には、国営の小学校が既にあったのに、古城の中にはまだ30余りの私塾が存在していた。私塾の教師にも優れた人物が多かったので、塾は古城の若

者にとっても魅力的な存在であった。

私塾以外に漢詩や音楽を楽しむ大人の文化結社もあった。例えば民国初期の「桂香詩社」、音楽を中心とした洞経会や楽会などを挙げることができる(2003年現地和林翰氏への聞き取り調査による)。

漢民族の文化は、麗江古城に見られる古風な住居にも現われている。住居の庭は、従来は漢民族地区の宮廷音楽である「ナシ古楽」を演奏する舞台であり、各楽会は不定期に会員の家に集まり、古楽を奏でた。四角い中庭の三方が家屋で、他の一方が壁となっている、いわゆる「三方一照壁」そのものの配置である。どこの中庭にも自慢の盆栽を並べた風情は、漢民族の居住地以上に漢化の進んだ雰囲気醸し出している(参考写真3)。現在でも正月はもちろん、普段でも古城の民家の門のそばに「春聯」⁷⁾というものを貼っている家が少なくない。

ナシ族土司の木氏一族は、自分たちのナシ族文化があるのに、なぜ積極的に漢民族の文化を学ぼうとしたのであろうか。その根本的な要因は実はナシ族の起源と非常に深い関係があったのである。

二. 茶馬古道の主人公—納西族

1. 古代(?～紀元738年)ナシ族の誕生

ナシ族は中国西南部に住む民族である。古代民族の西羌人^{xī qiāng rén}⁸⁾の子孫であり、行政上の生活範囲は雲南省、四川省、チベット自治区で、2000年現在の統計(王柯 2005 p.71)によれば、全人口は、30万8千人で、そのうち雲南省に295,464人、麗江四川省に8,725人、チベット自治区に1,223人が住んでいる。1949年の中華人民共和国の成立に伴い、1954年に、ナシ族の了承を得たうえで、中国国務院によって読み方が統一され、「納西族」が正式の名称となった。

(1) 遊牧民族から定住農耕民族へ

約2000年前に、ナシ族の祖先が既に麗江地区に住み、生活をしていたことが『華陽国志』⁹⁾に記されている。そこではナシ族のことを初めて「摩沙夷」として紹介している。

今のナシ族は元々麗江の先住民ではなく、中国西北部河湟地帯の西羌民族の一部「氐羌人」^{xī qiāng dì qiāng}という遊牧民であって、その後は南方へ移住し、四川省の岷江上流に辿りついた後に西南方向に向かい、雅礱江流域へ、さらに雲南省の金沙江



写真3 庭で演奏する古楽隊
(出典)2005年筆者撮影

上流の東西地帯に定着した。漢、晋時代には、ナシ先住民は「牦牛羌」あるいは「摩沙夷」と呼ばれていたが、やがて、四川省西部辺りの居住区域のナシ族が「摩沙夷」と呼ばれるようになった。しかし、唐代以後は、史書の上では一般に、么些(mo xie)、摩梭(mo suo)、么梭(ma suo)、摩梭(mo suo)、末些(mo xie)、摩些(mo xie)等の多様な名前で呼ばれ、ナシ族でも自民族のことを「納恒」「納日」「納罕」「么些」「摩沙」「摩梭」「摩拏」「納汝」「露魯」「邦西」「瑪利」「瑪沙」等とそれぞれの支系によって異なった名称を用いていた。

唐の時代になると、ナシ族は、バイ族などとともに雲南省大理を中心とした南詔国政権を形成したと言われており、当時自らの民族名を「納西(ナシ)」と呼んでいる。「ナシ」の各時代における名称と語系について図1示した。

「納」(ナ)は黒いという意味で、「西」(シ)は「人」または「族」の意味である。「納西」は「黒い人」だとする説は、中国建国以前にナシ族を研究していたロック¹⁰⁾や中国の研究者和志武によるものである。しかし、漢族によって「烏蛮」と称されたグループに、ナシ族も属していたこと、言語の面でも、生活様式の面でもナシ族と近い関係にある涼山イ族の自称ノスがやはり「黒い人」であること、南隣の民族がバイ族であることなどを考え合わせると、ナシは「黒い人」であろうかという推測も可能である(諏訪1988 p.19-20)。言語的には、ナシ語はチベット・ビルマ語系に属し、現在でも日常会話の言葉として使われている。

民族区分では、ナシ族はチベット・ビルマ系の民族であるが、麗江周囲に住むチベット族、イ族、プミ族、リス族、バイ族もみなナシ族と同じチベット・ビルマ系民族である。



写真4 出典『崇搬図』(李2001年 p.32)

(2) 民族の遷移を記録するナシ古書と民謡

「私はどこから来たのか?」という問いは、自分たちの命運に関わる問題だが、雲南省に住む多くの民族はそれぞれ自民族の「移住・形成史」を持っている。長い年月をかけて山や川を越えたことや、血と涙を流して部族を守り、子孫を残したことなど、民族の盛衰にまつわる生と死を記録した古い歌も数多く残されている。

ナシ族の固有の宗教東巴(トンパ)經典の『崇搬図』^{chóng bān tú}には、ナシ族の祖先の大移動が具体的に書かれている。ナシ族の祖先であり、本来騎馬民族であった羌人の一部が行動を起こし、民族「南下」大移動が始まった。麗江に辿り着くまでに、数え切れないほどの激しい戦いをし、多数の人々が亡くなった。例えばトンパ教葬式中の「洗馬」と「献馬」という儀式的由来は、ナシ先民が南下途中、巴塘と中甸において「巴人」(チベット人の一種康巴人)と戦った時に亡くなった多数の兵士を記念したものであった(木2003 p.205-207)。『崇搬図』の中でこのような苦難に満ちた民族大移動を歌の歌詞として記録し、その中で、ナシ族の民族的性格が形成され、ナシ族の民謡である「熱美搓」^{rè měi cuō}や「トンパ音楽」^{yù qì}などの歌に、その悲しみがこめられて表現されている。

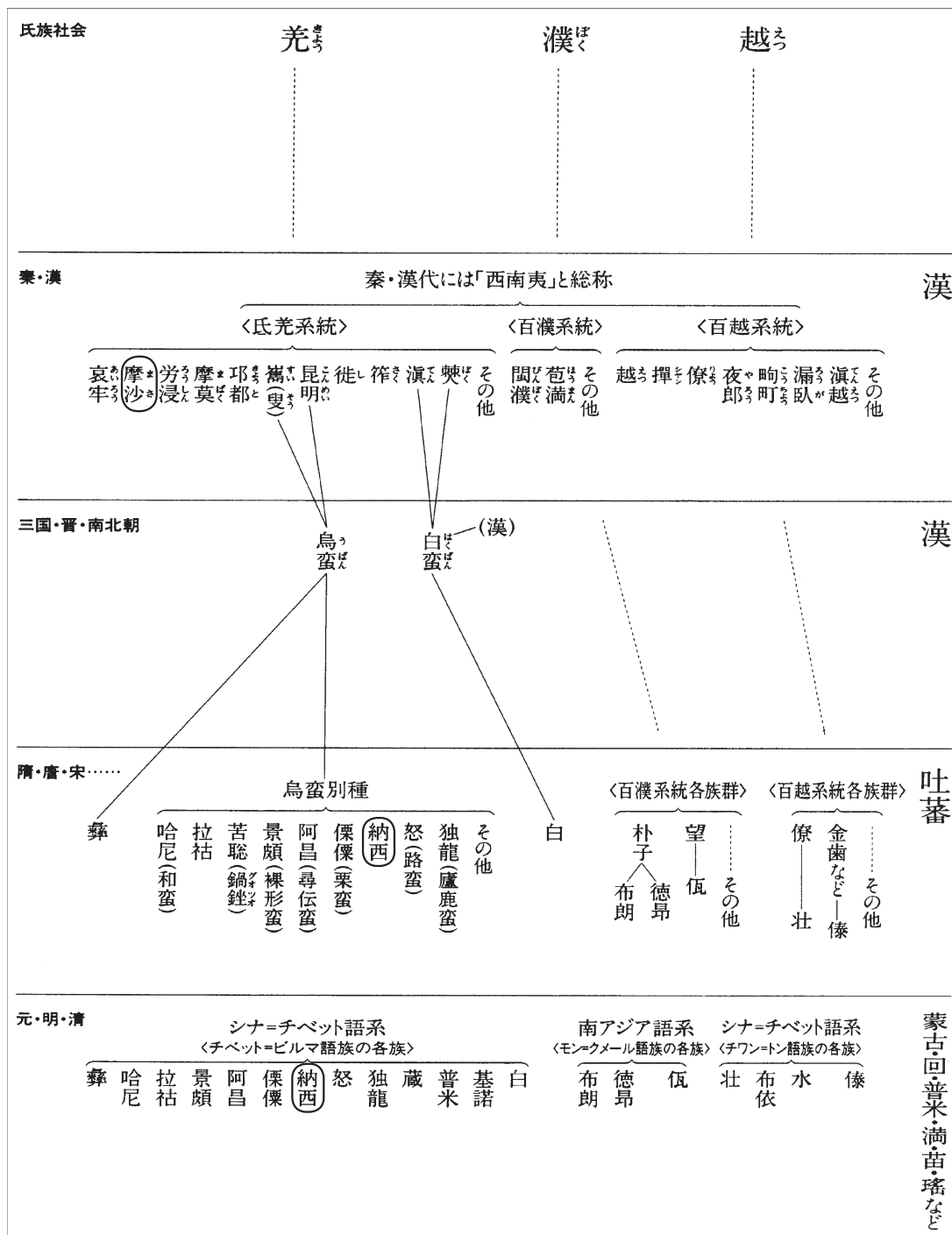


図1 雲南少数民族系統図
(出典)『雲南少数民族の言語と系統』p.240

2. 移民によるナシ族の再編成

(1) 麗江漢民族の移民と文化の伝来

ナシ民族は前述したように「西羌」の子孫という単一の民族ではない。長い歴史の流れの中で、麗江に定住した他の民族がナシ族との結婚や永久滞在などによって、ナシ族に同化され、現在のナシ族になった人たちも少なくない。

麗江市に住むナシ族の中では、特に元・明・清時代の移民政策により漢族の居住地中原から来てナシ族に同化した人が多数を占めている。こうした政策移民により、多くの漢族文化が雲南省に流入した。元来、中原地区の儀礼音楽であるナシ古楽も、元時代以後の移民によってもたらされたものである(宣 1999 p.45)。そこで、以下に元時代と明時代の「屯田政策」¹¹⁾による移民政策の経緯を検討していく。

(2) 元時代における屯田政策

宋朝を倒すために元軍が雲南省を征服した際に、長期にわたる戦争で、モンゴルから来た10万人の兵士は2万人に減っていた。

元時代以前、大理国時代には、雲南省では、多くの民族は貴族に率いられて分裂し、地域分立という状況に陥っていた。そのため、地域の生産力が低下し、社会不安が広がっていた。この状況を改善するために、元朝政府は以下の指令を出した。「于是内而各位，外而行省。皆立屯田，以資軍餉。」(訳：内部では自ら経営し、外部では節約する。軍事報酬をもらう代わりに、みんなで畑を開墾する)(『元史』卷一百『兵志三・屯田』から引用)。この指令に従って、「軍屯」と「民屯」という政策が実施された。これは、安い税金で空き地を軍人や民間人に貸し、政府に納める税金以外に、土地の自由使用や売買の権利まで与えるというものだった。

この政策の施行により、まず、生産力が向上

し、社会治安が改善された。また、軍事負担が減少し、元朝政府の税金収入が増加した。さらに庶民の実力が高まり、逆に領主の勢力が弱体化した。

「屯田」という制度の実施により、中原地区にあった優れた生産技術が雲南に導入されると同時に、兵の親族のさらなる移住によって、中原地区の音楽・生活習慣・風俗・漢文学などが雲南省の各地に流れ込んできた。さらに、忽必烈が漢民族文化の勉強を奨励したことが、その後、明時代になり、ナシ族の木氏土司一族から多くの漢文学者が輩出するよき基盤となった(郭・和 1999 p.262)。

(3) 明時代における雲南への移民

1370年代、明朝は元を倒して中原を征服した。元朝として唯一残されたのが元王朝の忠臣であった雲南の大理南昭国「梁王」である。当初、明創始洪武帝朱元璋は、雲南を辺鄙の地と思い、軍隊を派遣する意思がなく、何回も使者を出して帰順を説得しようとしただけであった。しかし、結局梁王はそれに屈せず、抵抗し、使者を殺していた。洪武14年(紀元1381年)、明王朝將軍傅有德^{fú yǒu dé}、左副將軍藍玉^{lán yù}、右副將軍沐英^{mù yīng}が洪武帝の命令を受け、30万人の軍隊を率いて南京を出発し、雲南に進軍した(徐 1999 p.138-139, p.142)。

その結果、梁王は征服され、傅有德・藍玉は南京に帰還した。明王朝は雲南における政權維持のため、右副將軍の沐英と9万人の軍隊を雲南に残した。その後、明王朝の統治に抵抗する勢力が各地で反乱を起こし、明の軍隊がそれらの反乱の鎮圧にあたったが、作戦が長期にわたり、食料不足もあって、軍の力は衰退しつつあった。このような状況下で、沐英將軍は元王朝の時に使われた「軍人屯田制」を洪武帝に提案し

た。不安定な状況が長期間続いていたので、雲南をよりよく整備する意図を持っていた洪武帝は、この意見に賛成し、1387年から1388年にかけて、僅か10か月の間に、屯田のために11回も外地から軍隊を雲南に送り込んだ。具体的な状況は以下のようである。

○1387年8月、四川省から2万5千人を選拔し、武器と農具を持たせ、雲南へ派遣した。

○9月、福建省・広州・広西・雲南からも軍隊を派遣した。

○9月、雲南に駐在していた沐英の部隊の中の未婚者を、屯田のため雲南の南部に派遣した。

○9月、湖広(現在の湖南省・江苏省周辺)から2万6,560人を高い奨励金を出して雲南に派遣した。

○9月、より広く湖南省・江苏省・浙江省などの地域から4万5千人を集め、農具をもたせ、雲南に行かせた(『明実録雲南事迹纂要』p.184-186引用)。

その後陝西省、山西省、河南省などからも多くの軍隊を雲南に派遣したので、僅か10か月の間に、雲南には少なくとも20万人あまりの

人々が移民したことになる。これに、従来雲南に駐在していた9万人を加えると、明朝の「屯田政策」によって、当時雲南には約29万人の屯田兵がいたことになる。

その後、洪武帝が移民させた屯田兵の精神的な安定をはかるために、1384年～1387年の間に、雲南への兵士の家族や親族の移民と独身兵士の結婚を奨励したので、一世帯3人と計算して、全体で80万人の漢族が雲南に定住したという推計もある(陸2001 p.8-48)。このような大規模な移民は、中国の歴史においても極めて珍しいことであるが、これにより、雲南省における漢族文化の基盤が築かれたことに注目したい。

「屯田制度」によって漢民族の移民が雲南に定住すると同時に、漢族が発達させた姓氏文化、儒教思想(孔子、老子など)、宗教思想(仏教・道教・仏教・回族教・など)、さらに、風俗習慣、飲食文化、芸術文化などの、さまざまな漢族文化を雲南に持ち込んできた。筆者が長年研究していたナシ族の儀礼音楽「納西古楽」もその時代に中国内地から入ってきたとも推測されて



写真5 南京応天府遺跡で集合写真、真ん中帽子をかぶっているのは筆者(出典)2003年筆者撮影による

いる。

明朝時代の初期から現在までの600年余りの間に移民した漢族の人々は、現地の民族に同化されることもあったが、移民は男性が中心であったので、姓氏は父系制の漢族の姓氏がそのまま残ることになった。名前から、自分の祖先は移民かどうかすぐに判断できるのである。

本研究の対象である大研鎮に住むナシ族の中では、本来のナシ土着民族の木姓(元貴族)と和姓(元平民)以外の姓の半数以上が漢民族の姓氏である。一般的には、その代表的な漢姓姓氏は、楊氏(本籍：湖南省)、習氏(江西省)、王氏(陝西省西安)、哈氏(四川省)、桑氏(河南省)、李氏(江蘇省)など100以上の漢族の子孫名が残されている。彼らは長い年月の間に、ナシ族に同化した、「家系図」や口伝で自分たちの先祖は漢族であることを知っている(唐 2001 p.1-21)。

ナシ族の人々には、自分たちの先祖は実は漢族であるという民族意識が存在し、それが麗江において、漢族の文学や文化に憧れ、積極的に漢民族の音楽や古典文学を習得しようとする重要な要因となっていたと筆者は推測している。2003年3月筆者は調査していた大研鎮納西古楽団と同行して南京公演に参加した際、公演後に楽団のメンバーの強い要望で古代南京应天府(明朝南京応天地区に所属した軍隊の総称)遺跡を訪ねた(参考写真5)。彼らたちは自分の祖先が明朝应天府の将兵だと自称し、漢民族の子孫という意識は非常に高い。

3. 中華人民共和国の建国とナシ族の認定

辺境を安定させるために、漢族の人を移民させるという政策は、1912年民国時代まで継続された。しかし、中国共産党の政権下では、雲南省に住む少数民族を相手にした政策よりも、

強大な勢力と人口を持つチベット族、モンゴル族、ウイグル族、満族、回族などの民族の力を分散させる政策が重視された。まず、「民族平等」というスローガンを打ち出し、国家による民族認識の政策である。「民族識別」工作が実施された。これにより、上述した強大な民族の下に、長い間隷属していた弱小の民族でも、自由に単独の民族として申請できるようになった。

民族識別政策は3期にわたって行われた。第1期は1953年の全国第1次人口調査である。中華人民共和国建国以来公認されていたチベット族、満族、回族などの11民族以外に、ナシ、トン、ブイ、バイなど27の民族が新たに「民族」として認定された。第2期の人口調査は1955年～1964年に行われ、この時期には、土家、タホル、ムーランなどの16の少数民族が認定された。その後、文化大革命が始まり、民族認識という活動も停止していたが、文化大革命終了後の1978年の第3次人口調査により、「ジノー族」(雲南)が最後の民族として認定され、55の少数民族プラス漢族を合わせて中国は56の多民族国家となった。

上述したように新政権による「民族平等」の宣伝に刺激され、自ら少数民族であると名乗るグループは400以上にのぼり、なかでも雲南省一省には260以上のグループがあった。

それらの民族を識別するために中央政府や地方政府から1,000名以上の民族学者、歴史学者、言語学者が少数民族地域に派遣され、言語、地域分布、経済生活、文化伝統、自らの民族意識などについて調査をおこなった。認定は、調査結果に基づき、考古学、言語学、人類学、歴史学などの観点から定めた少数民族認定基準にしたがっておこなわれた。基準は、「共同の生活地域、共通の言語、共同の経済生活、共有する

文化基盤に根ざす共通の心理素質と民族意識」とされていた。しかしこの地域、言語、経済、意識の4つの基準を満たしていない「少数民族」も多くいた。新しく認定された「少数民族」が、必ずしも緊密な一体性をもつ共同体ではないことが極めて特徴的であった(王 2005 p.45-78)。

ナシ族が認定されたのは1953年、第1期民族識別の時であった。当時のナシ族の人口は14万3,000人で、その中の10万5,000人が麗江周辺に居住している。ナシ族の密集地として一つの自治県として認められた。(2002年麗江市となった)しかし、既に述べたように、現在のナシ族は純粋な一つの共同体ではない。例えば、永寧県に住むナシ族の一部である「摩梭人」^{mó suō rén}は、母系社会の風習を維持し、自らの習慣や言語を持っている。いろいろな理由から、特に彼らの居住区がナシ族の密集地に近接しているため、民族区分の際にナシ族の所属とされたのである。なお、中国では民族より小さい集団は「〇〇人」と呼ばれている。これは公認されていない民族識別とも言える(王 2005 p.65)。

雲南省にある25の少数民族の中、漢民族文化に最も近いのはナシ族と言えるかもしれない。ナシ族が居住する地域は多くの少数民族地区と接続していることと、かつて貿易ロードである茶馬古道の重鎮であったとの要因から、漢民族文化教育を重視しながらも独自のナシ族文化を醸成してきたのではないかと筆者は考えている。

終わりに

以上、本論文では、「茶馬古道に関する民族文化研究 その2」として、茶馬古道の交易の中心地だった大研鎮について、その発展の跡を辿るとともに、その地で交易を支え、独自の文

化を築いてきたナシ族について、筆者の現地調査やその後の文献研究をもとに、その歴史の変遷を詳述した。

本論文で明らかにしたように、茶馬古道は、かつて中国の歴史の歩みに重要な意義と影響力を持つ漢文化とチベット文化を結ぶ大動脈として存在してきたが、現在もなお雲南高原地帯において豊かな民族文化の宝庫としての価値を高めつつある。しかしながら、茶馬古道の歴史や民俗的な研究は、まだ新しい学問であり、中国でも80年代の後半から茶馬古道に関する研究文献が少しずつ出版されている現状である。

古代の茶馬古道に関する多くの遺跡は大研鎮に残され、古代の漢、蔵(チベット)文化がナシ文化の中に多く継承されている。今後この貴重な文化遺産をどのように発掘・収集し、研究していくべきかが、筆者に課せられた重い使命でもあると受けとめている。

注

- 1) 西南シルクロード：前篇その1にも紹介されたように西の長安から中央アジアへ行く西シルクロードに対して、雲南省、四川省から南アジアのインドや東南アジアへ入るもう一つの商路を西南シルクロードと称している。この名称は多くの文献、例えば『雲南社会科学』2004や『回族与西南シルクロード』にも採用されている。
- 2) 茶馬古道：名前のように驢馬が茶葉を運ぶ道。「茶馬古道」という名称は雲南大学に所属している木雲弘教授たちが90年代西南シルクロードを考察した際に、初めて使用された。最近では西南シルクロードの代名詞として使われ、多くの文献にも認められる。本論文では「茶場古道」という名称を採用する。
- 3) 木氏土司：1253年～1723年までナシ族を統治していた木氏一族。木氏は明時代の時皇帝から与えられた名前、土司は明時代から歴代王朝が主に中国西南の少数民族首長に対して与えた世襲の官職であった。
- 4) 中原漢文化：長安や南京のような漢人が作り上げた都文化を指す

- 5) 徐霞客 (1586 - 1641 年) : 名は宏祖、号は霞客、明朝末の地理学者。知識人の家庭の出身で 22 歳の時から亡くなるまで、30 年間に中国華東地区、東北地区、東南沿海、雲南、貴州まで足を運んでいた。特に彼は晩年の時に 4 年間にわたって西南部の雲南省辺りを調査し、その時に記録していた日記『徐霞客游记』は、中国の古代西南の地理や歴史の研究に大変役に立っている (和 2005 p.4-23)。
- 6) 科挙試験 : 試験を通じて官吏、役人を選抜する制度で、中国古代における大切な発明でもあった。紀元 605 年隋代から始まり、唐時代のときに発展し、内容が深まった。清代末 1905 年までの 1300 年間に行われていた「科挙制度」は、中国の古代社会と文化に大きな影響を与え、試験による「士大夫」階層が誕生した。科挙制度はその後ベトナム、日本、朝鮮でも採用され、今の公務員制度もその科挙制度の延長でもある。科挙制度は時代によって異なるが、明清時代になって科挙制度は完全に定着した (第 2 章図 2 - 1 中国の科挙制度参照)。麗江では 1905 年に科挙制度が廃止され、麗江初の小学校が誕生した。
- 7) 春聯 : 漢民族地区における旧正月の習慣として門や入口の框に張る、めでたい文言を赤紙に書いた対聯。
- 8) 「西羌民族」は隋、唐時代までに「吐谷渾と吐蕃」という二つの国を既に持っていた。吐谷は東晋南北朝の時に既に建国され、統治階層は「鮮卑人」であって、羌人のみの国家ではなかった。その地域は現在の中国西部の青海北部地区であった。隋唐両朝の時に、2 度の派兵により、吐谷渾国は滅亡したが、それ以後は、唐王朝の西藩となった。一方、吐蕃国は次第に強大となり、吐谷渾を占領した。吐蕃は羌人によって建立された大国であり、その勢力範囲は現在の青藏高原地区に及んでいる。
- 9) 『華陽国志』は中国に現存している最も古く完成度が高い地方史を記録した書籍である。東晋常璩 (紀元 347 年頃) に書かれ、紀元四世紀の半ばまでの四川省、雲南省、貴州省という西南三省及び甘肅・陝西・湖北の一部地区の歴史、地理、人物が記載されている。中国古代史を研究する者にとっては大変貴重な史籍である。歴史、地理、人物という三部構成からなる内容は、中国でも珍しい古代文献の一つである。
- 10) ジョセフ・ロック (1884 - 1962)、オーストリア生まれ米国籍の植物学者として 20 年代から 1946 年まで麗江に滞在し、文化人類学者顔負けとっていいほど徹底的に、ナシ族の文化やトンパ教について研

究した人である。

- 11) 屯田 : 兵士などを遠隔の地に土着させて、平時は農業に、非常の時は戦争に従事させる中国従来の土地制度で、新領土や国有地に耕作者集団を導入して耕作させた。漢時代に始まり、明・清に至る (陸 2001 p.51)。

参考文献

中国語文献

- ・郭大烈・和志武 (1999)『納西族史』四川省民族出版社
- ・和鳳偉 (2005)「解説木府」『玉龍山』編集部出版
- ・何守倫 (2004)『麗江導遊読本』遠方出版社
- ・和雲峰 (2004)『納西族音楽史』中央音楽院出版社
- ・陸初 (2001)『变迁与交融 - 明代云南汉族移民研究』雲南教育出版社
- ・李錫 (2001)『崇搬图』雲南省美術出版社
- ・木麗春 (2003)『麗江茶馬古道史話』徳宏民族出版社。
- ・唐有唯 (2001)『麗江文史』 - 十九刊 (麗江姓氏考) 政協麗江納西族自治県委員会。
- ・王钟翰 (2006)『中国民族概論』山西教育出版社
- ・徐文徳 (1999)『明実録雲南事迹纂要』雲南大学出版社。
- ・宣 科 (1999)『玉龍山』雑誌社。
- ・楊福泉 (2005)『策劃麗江』民族出版社。
- ・余海波、余嘉華 (2002)『木氏土司与麗江』雲南民族出版社。
- ・中華書局 (1956)『元史』

日本語文献

- ・王柯 (2005)『多民族国家中国』岩波書店。
- ・諏訪哲郎 (1988)『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』学習院大
- ・中国地理紀行編集部編 (2003)『雲南少数民族の言語と系統』中国国家地理雑誌社。